

多元化する「能力」と日本社会 ハイパー・メリットクラシー化のなかで

本田 由紀 著

日本の1945年（昭和20年）までの戦争，それから60年間の経済戦争は，多くの成果をもたらしたが，多くの日本人の美德のかなりを奪い去った感がある。2006年は日本人のモラル低下を見せつけられた1年であった。諸外国，特にアジアの国々を歩いて感じることは，「日本の子供たちの目の輝きの無さ」である。元気いっばいであるべき子供たちの輝きの失せた目の現象は，質量両面からとらえてみる必要がある。生きるためのスピード，選択肢の多さへの迷いなどが量的には大きな原因と考えられるが，質的には「子供たちが変化した日本社会を生きるための対応の先取り」つまり，これまでの努力からの逃避の減少が「うつろな眼差し」になっているととらえられる。本書は，これから必要になる能力を探り，それへの対応方法の提言を行っている。キャッチアップ型でなく，新しい道を発見するフロントランナーとしての提言が主な内容であるので，疑問と思われる内容も散見されるが，これからの社会に生きるための課題の発見力，そのための論理的思考力，プレゼンテーション力，コミュニケーション力の育成の未来予測としては好適な書として一読をすすめたい。

著書は，現日本社会を，近代型社会（能力業績など近代型能力が支配する「メリットクラシー」）から，ポスト近代型社会（柔軟な対人能力などポスト近代型能力に重心を移した「ハイパー・メリットクラシー」）への移行期であるとし，大人より子供の方が早く後者に軸足を移していると考察している。

このような比較・分析の後，ポスト近代型能力育成のための教育の在り方を社会的にまと

近代型能力	ポスト近代型能力
基礎学力	生きる力
標準性	多様性・新奇性
知識量・知的速度	意欲・創造性
共通尺度	個別性
閉じた努力	開かれた努力

めようとしている。

そして最終章では，ポスト近代型能力育成の場として，次の場の重視を提言している。0番目「効率からの離陸」，1番目「家庭」，2番目「地域」，そして3番目「学校教育」における「総合的な学習」の重視，専門教育の強化の重要性，を述べている。これまでの日本の学校の近代型能力（画一的な知識量の修得度合）という一本の尺度からの克服の大切さ，専門教育の大切さが述べられている。

特に専門高校生の，体験学習から育つ対人能力の高さ，進路不安の低さに着目し，抽象的注入学習の限界に触れ，「自分の手で，はっきりと手触りのあるものとしての成果」こそ，ポスト近代型能力育成の中核にすべしとしている。私は本書を読み次のことの大切さを再確認した。

- ① 日本の子供たちの学習意欲は低いのではなく，先取りした内容の方に興味が先んじているのだ。
- ② 教育の再生は，再び「よく学べ，よく遊べ」を再現するしかない（内容の検討が大切）。
- ③ 学部・学科の再編を含め，大学・大学院制度の大幅な改革を急ぐ。
- ④ 諸悪の根源は入学試験制度にある。
- ⑤ 学校は幼（2）の上に，5・4・4・4の制度を中心にすべきと思う。
- ⑥ 15歳から3～4年（高校），普通科・専門学科・総合学科，この学校種別のどこに重心を置くか。普通（日本），専門（欧），総合（米）の比較を広い学力観から考え再編したい。

（NTT出版，286頁，2415円）（小林一也）